不定期刊行　　第 494 号　2013.08.18

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩
池田工業高等学校

池工山岳部、ちょっとハードな涸沢合宿

13 日から 16 日まで 3 泊 4 日で涸沢をベースに池工の山岳部の夏合宿を実施した。池工は 19 日から 2 学期が始まるし、僕自身の事情もあってお盆の真最中の合宿となってしまったので、参加生徒は 1 年 3 名、2 年が 2 名の 5 名のみ。しかし、少人数ゆえに逆にハードな内容を計画できた。顧問は佐藤先生と僕、コーチの山内さんが同行した。

13 日は朝学校に集まって、上高地入り。横尾では大町高時代の佐藤さんの教え子の藤沢君が県警山岳救助隊員として登山指導中。立派に山岳救助隊員として、活躍している姿が頼もしかった。涸沢には 15 時 30 分に到着。驚いたのは、残雪の多さ。涸沢小屋と涸沢ヒュッテの分岐の下からしっかり雪が付いていた。こんな時期にこれほどの残雪を見たのは初めてだ。一方、お盆の最中にも関わらず思ったよりテントの数は少なかった。

14 日は、「横尾本谷から右股を遡行、黄金平を経て、南岳に登りその後、大キレットを越えて北穂に登り、涸沢に戻る」というバリエーションルートを含む難コースに挑戦した。夏の安全登山研究会の際、「涸沢に定着するのなら是非！」と松田さんにけしかけられたことに加え、生徒も目が届く 5 人、ザイルを組めるパートナー山内コーチの同行、さらには天候にも恵まれそうというなどと条件が整ったので決行することにした。

5 時に涸沢を出発。本谷と涸沢の出合付近まで登山道を下って、本谷に取り付く。昨日来るときに見た感じでは、それほど難しいとも思えなかったが、2 か所ある雪渓の通過がカギになりそうな感じはあった。しばらくは左岸を遡上していく。長谷川ピークへと突き上げる左股との分岐を過ぎ、しばらく進むと最初の雪渓があったが、ここはなんとか乗り越えた。いくつかの美しい滝が連続するが難しくはない。一か所滝と大岩に阻まれたが、そこは右岸に古いフィックスがあり、それを使って上部に出た。その先がノドになっており、そこが二つ目の雪渓で中途半端に埋まっていた。シュルンドが大きく開いており、雪渓に乗るのが困難な上に、上部も沢に降りられるかどうか微妙だった。左岸の草付きをトラバるしかなさそうだが、この傾斜で生徒を安全に通過させるためには、フィックスを張るしかない。そこで僕がトップで 50m先行し、フィックスを張った。念のため生徒にビナを 3 枚と細引きを持たせていたのが奏功した。その先、雪渓を巻き込むまでもう一本今度は山内コーチにフィックス工作をしてもらった。最後は、懸垂で河原に下ったが、この通過に 1 時間半ほどを要した。まさに転ばぬ先の杖、ロープあればこその危険地帯の通過だった。その後は、軽快に高度をかせぎ、9 時 40 分エンドモレーンの上に出た。「黄金平」の名を聞いてはいたが、山上の別天地。横尾尾根と南岳の南東の尾根に囲まれた素晴らしいカールが広がっていた。振り返れば屏風岩がまるでトトロのような形で低く見え、前穂に続いている。この素晴らしい景観を自分たちだけで占有している幸せ。カールの底からは 1 ピッチで横尾尾根のコルに登りあげた。時刻は 11 時、天気も最高で周囲の景色もほしいまま。しかし、このルートはここからもが長い。まずは南岳へ。生徒にはたっぷり水を持ち上げさせたつもりだったが、ここまでで生徒の水が切れた。小屋で水を分けてもらい、いよいよ第 2 の核心部、大キレットへと足を

踏み入れたのが、13 時 5 分。

順調に南岳からの悪場の下りを終え、最低鞍部を過ぎ、いよいよ長谷川ピークへかかる直前のなんでもない場所でのできごとだった。僕が先頭で飛騨側への小尾根を巻きこんだ時、30mほど先で北穂からこちらに向かってきた登山者が足を躓いて転倒、そのまま岩稜を滑落、頭から 2 回転して止まった。「あっ」という僕の声に生徒も気づいた。慌てて駆け寄ると、左の脛に骨が見えるくらいの裂傷を負っていた。北部遭対協の隊員でもある山内コーチがとりあえずの応急処置を施す。時刻は 14 時 30 分、我々も猶予もならない時間である上に、これから長谷川ピークの通過をしなければならない。要救者は気丈にこの先進むというが、これではこの先進むのは無理だ。70 年配の父親が息子を誘っての登山をしている最中に、経験者の父親が怪我をしたというのが事故のあらまし。暫く山内さんと僕で対応を考え、これはヘリレスキューしかありえないと説得。あとは、山内さんに任せて先を急ぐ。その後ガスが出てきたのでヘリのピックアップも難航したが、5 時ちょっと前に無事に救出は完了。無線でその様子を聞きながら先行した我々は、16 時 30 分に北穂に登頂。くたびれ果てた生徒とともに涸沢に着いたのは 18 時 10 分、なんと 13 時間行動だった。一方、山内君は、その後一人残され動転した上に山経験も少ない息子さんを北穂の小屋までサポートして送り届けた。彼が涸沢のベースキャンプに到着したのは 9 時半を回っていた。

翌 15 日は、テントを撤収してスタートしたのが、6 時 35 分。前日はサブ行動だったが、この日はメインで奥穂、前穂を越えて岳沢まで縦走した。まずはパノラマコースからザイテングラードへ。雪渓上は風も心地よかったが、お盆のザイテンはすれ違い渋滞も発生。それでも 3 時間で穂高岳山荘まで登りつめた。生徒には「日本で 3 番目に高い山に登るぞ」と発破をかけ、背後の北穂、槍の姿を眺めながら一歩一歩登っていく。標高を上げるとジャンダルムも見え始めてくるが、それとともにガスも湧いてきた。10 時 50 分、奥穂山頂。残念ながら眺望は得られなかったが、全員で記念写真を撮って登頂を祝う。時折ガスが晴れると荒々しい岩稜が見え隠れする吊り尾根を通過するのには 1 時間半を要した。身体は疲れてはいるものの、合宿 3 日目になると山に慣れてくる。紀美子平にザックをデポして前穂に登ったが、ここもガスの中の山頂になってしまった。それでも合宿中に 3000m 峰に 4 座登れたことには生徒たちも満足げである。

しかし、このコースは最後まで気を抜けない。疲労している上に、荷物を背負っての重太郎新道通過の危険は重々承知の上。最初の逆相の鎖場を慎重に下り、あとは長い急坂を確実に一歩一歩刻ませながら、事故の起こらないように岳沢を目指す。疲れている生徒は、膝が曲がらずに一歩一歩がブレーキになってしまうような歩き方になってしまっている。生徒たちは、次第に口数も少なくなってくるが、新主将になったK君が、健気に 1 年生を励ましている。自らも辛かろうに自分の昨年の合宿の辛さを引き合いに出しながら 1 年生に声をかけている姿を見ると、山が生徒を成長させてくれるのだと改めて嬉しくなる。テント場に着いたのは 17 時を少し回っていた。本日の実働 10 時間半。

食事を終えたころから雷鳴が轟き、雨も降った（下界では諏訪湖の花火が中止になるなど大変だったと後で知った）が、それほどでもなく、翌朝は 7 時出発、9 時過ぎには無事上高地に到着。上高地からは、穂高がとても大きく見えた。3000m 峰 4 座登頂。バリエーションルートに加え、北アルプスでも屈指の難コースである大キレット、ザイテン、重太郎新道とちょっとハードな縦走は生徒にとって大きな自信になったことだろう。